

学級担任としての教育相談の展開

— グループ・カウンセリングを基調にして —

川久保 正 雄^{*}

I 研究の目的

この研究はホームルーム担任として自分のクラス（商業科2年B組）に行なったグループカウンセリングを主体にした教育相談の実践記録である。最近の高校に共通して見られる生徒との距離感、断絶感を埋める接点としてホームルームを考え、そのアプローチとして少数集団によるグループカウンセリングの実践をこころみた。生徒と担任教師との間により高い共感的理解を求め、それによってより高いガイダンスを期待している。

I 研究の目的

本校をとりまく環境（新井市および頸南地区）は人物風土ともに穏健であるが、反面やや消極的であると言われている。生徒にもその傾向が見られ積極的に自分を表明することを苦手とする生徒が多い。クラスでも3分間スピーチ、1分間スピーチをホームルームでとりあげて見たが満足すべき結果はえられなかった。それで（1）生徒各自に問題意識や関心があるとすればそれは何か。（2）生徒同志および生徒と担任教師との間に共感的理解をうるためにはどんな方法が適切か。（3）結果としてクラス内に友情の輪を広め各自を問題解決の最短距離におくにはどうしたらよいか。などについて考察を進めていきたい。

II 研究の方法

- (1) 研究の対象。商業科2年B組の生徒46名（男子17名、女子29名）。生徒の反応は主としてアンケートおよび面接記録によるが、アンケートは2年A組および商業科全学年に実施。本校は他に普通、工科、農科、被服の4課程があるが前述の商業科に範囲を限定した。
- (2) 調査の種類。面接記録、アンケート、個人理解のためのAAI、学習適応性検査（AAI）、矢田部ギルフォード性格検査（Y.G.T.）

III 実践と考察

1 アンケートの結果

問題意識をもつ生徒が程度の差はあっても多数をしめていることは（表1）からもうかがえるが、大多数の者は教育相談を解決の場として受けとめているとはいえない。拒否の態度の者や自分で解決し

* 新潟県立新井高等学校教諭

たいと考えている者、つまり来談のための動機づけのない者に関してはそのような生徒の背後の可能性に注目したい。表面的には「カウンセリングを受けたくない」としていても可能性として「受けて見よう」とする気持ちが存在しているかも知れないからである。このことはグループカウンセリングが第1回を終了した時点でのアンケートからもうかえるのである。(表2)。

2 グループカウンセリングの展開

- (1) ホームルーム担任としてグループカウンセリングをどのように考えるかについて以下ふれてみたい。
- ・ (ア) 前にもふれたが地域の特性でもある対話のとほしさを解きほぐすきっかけがつかめるのではない。
 - ・ (イ) ホームルーム担任、教科担任、クラブ顧問、校務分掌など多面的な仕事の合い間にカウンセリングの時間を設けるのは容易なことではない。アプローチの手段としてのグループカウンセリングに問題はあっても時間の効果的利用という点で期待できる。
 - ・ (ウ) グループカウンセリングで問題傾向の顕著な生徒は後日来談するように仕向けるか呼び出し相談によりスムーズに個別カウンセリングへの導入ができるのではないか。
 - ・ (エ) グループになったメンバー相互に連帯感、共通理解、受容が期待されるのではないか。
 - ・ (オ) グループのメンバーがカウンセリングの最中でも終わってから教室にもどってもお互いの援助者になるのではないか。級友を理解し受け入れることは自分にとってもたいせつなことである。
 - ・ (カ) 話しやすいふんい気ができるのではないか。無口な生徒には思っていることがうまくことばにならないとしてもグループの他の者がまとめてくれば気持ちの安定と共感の場がつけられる。
- (2) グループの構成。5人～6人ずつ原則として機械的に編成する。自分のクラスの生徒であるのでかなり理解できる。(昨年度は半数を担任している)メンバーの性格、知能などは時に考慮しなかったが対立感情の強い者同志は避けなければならない。放課後生徒の出はいりの少ない特別教室を利用して約30分～60分実施する。
- (3) カウンセラーとして気をつけたいと思ったこと。(ア)くつろいだ話しやすいふんい気をつくる。
- ・ (イ) グループ内に好ましい共感の渦をつくる。
 - ・ (ウ) 発言をたいせつにし、フィード・バックに心がける。
 - ・ (エ) 皆に公平であり自分自身が安定しているようにつとめる。

3 第1回(1学期中間考査の終了後まもなく)のグループカウンセリングに期待

(ア) 新しい学習環境、生活環境への慣れの程度を知る。新たに担任した生徒。昨年から引続いている生徒を交えて話し合いのきっかけをつくるために中間考査の終わった時点で環境になれてきた度合を尺度する。傾向として考査の反省が多く出て来ることが予想されるが、ここから勉強の仕方、学校生活、自分の人生観、などへの展開を期待したい。(イ) 中間考査後の気持ちの落ち込みを防ぐ。学力の劣る生徒には初めての考査の不振の精神的動揺は大きい。成績のよい生徒を引しめ不振の生徒を勇気づけるためにもカウンセリングを必要とする時期ではないのか。

〔第1回記録〕 (第8班 女子5名)

教師：中間考査も終わって皆ほっとしたことだと思うのだけれど考査のことでもよいしそれ以外のことも何でもよいから今思っていることを気楽に話してほしいんだけど。

生徒A：（しばらく沈黙の後で。この生徒はクラスで一番積極的。）世界史はショックでした。答案が返されてから大部たつのですが今でも考えてしまいます。

教師：世界史の成績が問題だった訳ですね。皆がいてもさしつかえなければもう少し聞きたいと思いますが。

生徒A：勉強は私なりにしっかりやっつつもりなんですが予想外に成績がわるいんです。教科書をしっかり読んでからノートも勉強したつもりなんですが予想外に成績が悪いんです。期末考査もこの方法でやるよりしかたがないと思うのです。だからそれだけ不安なのです。

教師：勉強のしかたが不安なんですね。期末考査も同じ方法でのぞみたいと思っているだけにその気持ちが強い訳ですね。ところで今A子さんの発言を聞いていて皆に“ほっとした”ような気配が感じられたのだけれど発言したいなあと思っている人がいたら話してくれませんか。

生徒F：世界史の成績のことはクラスの人みんなが困っていると思います。

教師：クラス全体が困っているとあなたは考えている訳ですね。（3分ばかり沈黙）

生徒A：教科書やノートのほかに参考書をいっしょに読む人もいるらしいけれど私にはとても手が回らないような気がして。

教師：いろいろ考えたのだけれど結局勉強の方法で迷っている訳ですね。

生徒S：私は中間考査の成績は全体に振わなかったのです。私自身の気持ちが考査どころではないんです。

教師：中間考査に気持ちが集中できなかったのですね。

生徒S：私、考え出すと頭の中がカーッととなって訳がわからなくなってしまうのです。考査だけでなく他の事でも。（この生徒は今年始めて担任した生徒でもありこのような発言は私にとって初めて聞かされることでもあったので私自身の気持ちが動揺したことは否定できない。）

教師：訳のわからなくなることが時々あるのですね。もう少しわしく聞きたいと思いますが。

生徒S：はい。私の家の中のことなんです。中学校の時からずっと続いて来ているんです。

教師：中学生のころから家庭内のことでいろいろと問題があった訳ですね。ほかの人も聞いているのですがさしつかえなければもっと詳しく聞かせてくれませんか。

生徒S：今は言えませんが、後で話すことができと思います。（以下略）

この生徒に関しては夏休みを含めて3回の個人面接を行なった。期末考査時の不安程度が心配であったが考査も完全に受験し成績も中間考査より向上している。AAI診断プロフィールによれば家庭の環境（心理的環境）、友人関係、不安傾向に大きな落ち込みをみせている。またY-G性格検査ではA型を示している。家庭内の違和感として最も大きい要因は父親の酒乱でありそれが母親との不和を生み、家計をも圧迫していることが我慢ならなかったようである。3回目の面接の際に酒を飲まない時の父親や、腕時計を買ってくれたときの父親の良い一面を話すようになった。青年期の生徒の規範意識など超自我は父親との同一化過程で形成される場合が多いことからして考えさせられる問題でもある。

〔第1回の考察〕

グループカウンセリングの1回目を終了して感じたことは発言のない生徒や問題のない生徒にも共感

的理解や受容が各自の気持ちに生まれたのではないかということである。このことは、表2からもうかがい知ることができるのである。個別カウンセリングに移行した方がよいと思われた生徒はS以外に3名であった。希望する進路と自分の能力とのへだたりになやむ者。家庭のことで悩む者。不安感情に流されそうになる者等である。

4 第2回グループカウンセリングへの期待

前回と基本的には同じであるが次の諸点が考えられる。(ア)学校生活への早急な復帰への期待とそれを阻害する原因を取り除き50分の単位時間に組み込まれた学習中心の生活に早くもどること。(イ)学習を中心とした環境の個人整備を早急にはかること。(ウ)第1回を体験していることからカウンセリング場面そのものに前回と違った変化が期待できないだろうか。つまり「聞かれたから返事する」ではなくて「感じたから話す」方向に近づきはしないかということである。学校内外の諸行事に機会をうばわれて実際の開始は9月中旬になってしまったので第2回は前回のようにテーマをあらかじめ決めることをせず全くフリーでのぞんだ。

〔第2回の考察〕

放課後の約1時間をあてたのであるが創立60周年記念行事の打ち合わせやその他分掌上の会議のためにとびとびになり9月末日までにクラスの半分しか消化できなかった。グループのメンバー構成、面接場所などについては前回同様であった。以下面接を終了した生徒の感想文を掲載し第2回の考察をする。

① 他人の意見を聞くことは非常に参考になった。しかし、わがままだけれど自分の考えをオープンに話すことはできなかった。(周囲の人を意識して)。もっと時間をゆっくりとっていろいろな事柄を話してみたい。グループカウンセリングが終わって強く感じたことは先生と私は面接している時はすごく接近していて何でも話せるようだけれど、いったん教務室にもどられてしまうと(単なる先生と生徒の位置にもどると)先生とのへだたりが何千メートルにも感じられる。

② 本当のことをいうと私は高校の先生は大きらいでした。私たちと少しもなじめなくてただ勉強しろ、勉強しろと言われただけだったように感じたからです。グループ面接が終わって皆の気持ちがわかったのですが、先生の考えていられることがわかって気持ちが楽になりました。

③ グループ面接は私にとって、はっきり言って時間の無駄使いをただけのような気がします。もう少し何か期待のできるものがあってもよかったように思えます。私の頭の中にできていた教師のイメージと先生という人が違っていたのかも知れませんがこの頃の先生にガッカリさせられることばかりの気がしてなりません。ここまで言うとし礼かも知れませんが正直な気持ちです。

④ 良かったと思う。話し終えたとき今まで何とも言えない“もやもやしたもの”がふっ切れたような満足感があった。皆の感じ方は十人十色のようなのであるが私には良かった。グループカウンセリングは話していくと思わないでもなかったが私たちグループの人は私にとって良い人たちばかりのせいかな話し興味深い楽しい時間だった。これからテストの話だけの面接だけでなくいろいろな事からをグループカウンセリングを通じて話したい。

⑤ 私はグループカウンセリングがあまり好きではありません。しかし勉強面の話題がなかったのでうれしかった。勉強面のことに関しては皆と話をしていると、とてもみじめに自分が思われてなりません。いろいろな事から出たけれど何となく皆友だちは、というよりは人間は同じ年代のときは皆同じように悩みや苦しみがあるのだなあと初めて知りました。だから少しは気持ちが落ち着きましたか私自身無口な方なのですし自分の話したいこともうまくしゃべれないし、そんな事を思うと“むなしさ”みたいなものを強く感じます。これからは勉強面ではなく話題をきめないでグループカウンセリングを何回もやってほしいと思います。

⑥ グループカウンセリングの時の私の気持ち。“むなしさ”を感じた。理由は何となく……何となくである。私は口下手なものだから自分の思っているままを言うことができない。あのような場に出るとなおさらである。今回のグループカウンセリングについて私は何かもの足りなさを感じた。1つの話題でもよい。そのことについて徹底的に話し合いたい。

彼らにとって高校教師とは一体何なんだろう。学校とは、友人とは、両親とは……このように考えると私のクラスの生徒でありながら担任の私自身が“生徒の気持ち”をどれ程聞いていたのか疑問に感じるのである。“成績”を通じてのみ生徒を感じることはできるだけさけたいと考えていたが、生徒が“高校の教師は成績と言うフィルターを通じて我々を見がちである”とするならばどうすればよいのか。揺れ動く自我の中で彼らは教師も両親も時には友人さえも拒否する。2回目の面接の記録からその一部をぬきがきする。

生徒Y：私は悩み事があっても先生にも親にも友だちにも相談したくありません。私自身が全く嫌になってしまうことがあるんです。

生徒Y：だから私の気持ちの中にやりきれないものがだんだんたまって行ってどうにもならない時に爆発します。それが両親であったり、兄姉であったり、友人であったりするわけですがその事ではちっとも問題解決にはなっていないような気がします。

生徒K：両親は私にとって“悩み事”と言う問題になれば他人と同じです。ちっとも頼りになりませんし、友達に話してみても私の考えと似たような返事しか期待できないし、第一今の私には友だちに打ち明けられる悩みと誰にも絶対言えない悩みのふたつとおりがあるような気がします。

IV 今後の展開と課題

グループカウンセリングは如何にあるべきかについて明快な結論をもっていなし現在試行錯誤を繰り返しているが、かくすれば学習本位になりがちな高校にあって生徒との心のふれあいを期待できるたいせつな接点であると思う。繰り返し繰り返しこの接点を積み重ねていけば彼等も“あるがまゝの自分”でふれてくるに相違ない。またグループカウンセリングを側面から支える事がらとして従来のありきたりの学級日誌を廃して自由に意見が書けるスペースをもった学級日誌に作りかえたりクラス行事を数多くもって生徒と教師、生徒相互の交流の場を作りたいものである。疎外から共感へ、少しでも多くの生徒の心を動かしたいものである。

参考文献

河合雄著 カウンセリングの実際問題 誠信書房 P42
実践研究集録 第8集 県立教育センター

(表1)

項	目	男子	女子	計
問1 カウンセリングの言葉の意味	イ知っている	0	22	22
	ロ知らない	17	7	24
	ハ無 答	0	0	0
問2 本校の相談申込み手続きについて	イ知っている	8	21	29
	ロ知らない	9	8	17
	ハ無 答	0	0	0
問3 相談室の場所について	イ知っている	5	15	20
	ロ知らない	12	14	26
	ハ無 答	0	0	0
問4 相談の活動内容について	イ知っている	1	4	5
	ロ知らない	16	24	40
	ハ無 答	0	1	1
	イ必 要	8	16	24
問5 相談係など制度の必要性について	ロ不 必要	0	2	2
	ハどちらでもよい	6	7	13
	ニわからない	3	4	2
	イすぐ解決したい悩みあり	2	2	4
問6 なやみの有無について	ロ大した事ではないがある	9	26	35
	ハ全くない	5	1	6
	ニ無 答	1	0	1
	イ大いに利用	0	0	0
問7 なやみ解決のための相談室利用について	ロ何となく行きにくい	4	6	10
	ハ学校以外の場で解決する	5	17	22
	ニどうしてよいかわからぬ	1	5	6
	ホ無 答	0	1	1
	イ友 人	10	19	29
問8 なやみの相談相手について	ロ先 輩	1	2	3
	ハ両親	3	3	6
	ニ兄 姉	1	2	3
	ホ中学の恩師	2	0	2
	ヘ担任の先生	1	1	2
	トその他	0	1	1
問9 相談をうけにくい理由	イ何となくはいりにくい	13	13	26
	ロ先生に信頼がもてない	1	4	5
	ハ相談しても無駄だと思う	2	12	14
	ニその他	0	0	0
	ホ無 答	1	0	1

(表2)

項	目	男子	女子	計
問1 グループ面接か個人面接か	イ個人面接	4	8	12
	ログループ面接	8	13	21
	ハどちらでもよい	4	7	11
	ニ無 答	0	0	0
問2 個人面接の場合	イ他人を意識せずにすむ	2	4	6
	ロ他人の話は参考にならぬ	1	0	1
	ハ自分に集中してほしい	1	3	4
問3 グループ面接の場合	イ他人の話は参考になる	4	7	11
	ロなごやかなふんい気が出やすい	4	6	10
	イ1時間以上	0	4	4
問4 時間について	ロ30分から1時間	15	24	39
	ハわからない	2	1	3
問5 人数について	イ5～6名	11	9	20
	ロ2～3名	1	14	15
	ハその他	0	3	3
	ニわからぬ	1	0	1
	ホ無 答	4	3	7
問6 グループ面接の回数	イ無制限に	1	3	4
	ロ1学期に2～3回程度	9	24	33
	ハわからない	7	2	9
問7 グループ面接が終わったときの印象	イ共感をおぼえほっとする	9	14	23
	ロ友人との距離を感じる	4	5	9
	ハ気楽に話せる友人が出来たようだ	1	1	2
	ニかえって固苦しい感じを友人にもつ	1	0	1
	ホ特にない	2	9	11
	ヘ無 答	0	0	0

(数字は実数)